

手と手をつないで

No.362

やまぐち ひろゆき
山口 裕之

(マザー・アース人権啓発研究所主宰)



同和問題、そつじ いのちと向き合う7月21

太宰府市をはじめ福岡県では、同和問題の早期解決をめざして、毎年7月を「同和問題啓発強調月間」と定め、差別をなくすための取り組みを展開しています。「同和問題ってまだあるの?」という声も耳にします。が、部落差別は見えにくくなったように、現存しているのです。特に近年はインターネット上での差別や土地調査・結婚・就職における差別など、社会の変化によって新たな差別につながる事象が発生しています。

○偏見・差別意識は事実から離れて作られます

私は近年まで31年間教職につき、保護者や地域住民の方々とともに研修を深めてきましたが、同和問題についてしばしばまちがった認識が語られます。いくつか例をあげましょう。

①「あの地域はこわいから気をつけて」…それを言う人は実際に自分が体験して言っているのでしょうか?うわさ話や悪意ある情報を事実確認せずにそのまま信じ、広めてはいないでしょうか?

②「差別が嫌なら引っ越せばいいの

に」…差別を発生させているのは周囲の誤った意識や行動なのに、どうして当事者の人だけが住み慣れた地域を離れてお金を使っているのでしょうか?

このように無知はゼロではなくマインナスにはたらくのです。現在、全国的に学校教育や社会教育では、人権問題に関して正しく知る・認識することで差別や偏見をなくす取り組みが進んでいます。



○「コロナ禍以前の社会に戻ればいい」ではない

長期化するコロナ禍のストレスに伴って、人種差別・職業差別・部落差別・外国人差別・風評被害・誹謗

中傷やデマなど、私たちの心の奥にかくれていた差別意識が言葉や行動に表れてきた部分も明らかになりました。福祉や医療のあり方について、みんなで見つめ考えようとするようになってきました。世界中で新型コロナウイルスとたたかっているこの時期に私たちは、単に「前の世界にもどる」だけでなく、その先をめざしたいと思います。今までにみえてきたこれまでの社会の矛盾や課題にしっかりと向き合って、人と人とが温かくつながり生きていける新たな社会を創り出したいところです。

○私たちの「気づき」を紡ぎ、新たな行動へ

さまざまな差別・不合理をなくしていくには私たち一人一人の「気づき」が必要です。この気づきを重ね、紡いでいくことで新たな目標や行動が生まれてきます。そしてそれぞれの立場に「心を寄せる」「歩み寄れるようになる」ことはまさに自分自身を豊かにしていくことにつながります。この7月の「同和問題啓発強調月間」の機会に、一度立ち止まって自分自身の心や行動を振り返ってみてください。誰一人として取り残さない地域社会づくりを進めるために――